

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531199

研究課題名(和文)「郷土教育の現代化」をめざした郷土教育モデルの構築

研究課題名(英文)The construction of the Kyodo-kyoiku model.-For "modernization of Kyodo-kyoiku."-

研究代表者

飯島 敏文(IIJIMA, Toshifumi)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80222800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：「郷土」と言えるのは次のような空間である。1)子どもたちが日常生活を送る空間。2)子どもたちが日常的な学習活動を行う空間。ただし、これらの空間は子どもたちにとって身近に感じられているべきである。子どもの日常的な経験が提供される多くの機会を「郷土」が有しているのである。子どもたちの経験の中で、特に「経験密度」が子どもの成長発達において重要なメルクマールとなることが解ってきた。経験密度の把握は経験のポテンシャルを示すものであり、経験を制御するために経験密度の濃淡が有効に機能し、さらに効果的な郷土教育モデルの実現が期待される。

研究成果の概要(英文)："Kyodo" is the following space . 1) The space where children live under daily life. 2) The space where children perform daily learning activity. If these space should be felt for children friendly, "Kyodo" has many learning opportunities when the daily experience is offered. The "experience density" is the important factor in the growth of the child in particular. The grasp of the experience density shows potential of the experience, and the light and shade of the experience density function effectively to control experience, and the realization of a more effective education for "kyodo Kyoiku" model is expected.

研究分野：教育学

キーワード：郷土教育 現代化 郷土教育モデル

1. 研究開始当初の背景

子どもの発達環境であるところの生活空間は、かつて「郷土」と呼ばれた空間である。郷土教育においては、子どもの直接的な経験が可能な教材を用い、子どもが具体的な事物や事象と関わりつつ活動することを通して、直観によって環境世界の認識が実現されるものと考えられていた。

かつて我が国においても、ドイツの Heimatkunde や Gesamtunterricht の手法を取り入れた郷土科や合科教授において実現されていたものである。しかし、学校教育におけるこうしたアプローチは子どもたちの興味関心に即するという「前提」が、ともすれば「目的化」されていたケースが少なくない。郷土における諸事物や諸事象を扱った具体的活動を導入すれば、子どもの中に予定調和的に郷土に関する認識が形成され、郷土との関連を通して郷土外の諸事物・諸事象への認識が成立するという仮説は、学力低下を招くという批判を回避できない。これでは郷土の教育的価値は実現されない。

研究代表者は、大学卒業研究から上記に関連するアプローチを継続しておこなっており、ドイツ改革教育学の時代の Heimatkunde や Gesamtunterricht の教育理念と授業理論に学び、また、第二次世界大戦後の西ドイツ復興後の Sachunterricht の成立経緯及び我が国の生活科との比較考察などの知見も踏まえている。その見地から、近年は我が国において子どもの生活空間が大きく変化し、日常生活を営む空間と学習内容とが時として大きく乖離し、子どもたちが現実感覚を喪失しつつあるという危機感を抱いているところである。

経済活動がグローバル化した現代にあって、身近な生活空間の中にこそ、人類の取り組むべき課題がリアルな現実態として存在することが子どもたちに意識され追究対象として認識されるべきである。その課題を郷土における具体的な事物や事象という教材として位置づけ、それに基づいた学習活動が学校教育カリキュラムの中に位置づけられるべきであると考え。そのことが郷土教育を現代において実践する価値を生むものとなる。

2. 研究の目的

本研究は、子どもが日常生活を営む生活空間としての郷土教材の教育的機能に着目し、まず郷土が学習者たる子どもにとっていかに経験され、意識されているのかという実態を明らかにする。

その上で、郷土という存在がはらむ教育的諸要素を抽出するアプローチを通して、郷土が有する教育的機能を可視化し、オリジナル郷土教材の開発と郷土空間における学習活動のモデルプランを作成することを目的と

する。同じ地域で生活する子どもに対しても郷土教材は多様に価値づけられる。本研究は、具体的レベルを捨象した諸事象・諸事物が有する一般的特徴を概念的に記述するとどまることなく、具体的な教材を開発し、その教材に関わって実現可能な教育的機能を解明した上で、学習活動の構想を行うことで他地域にも適用可能な郷土教育のモデルを構築するものである。

3. 研究の方法

本研究は、まず昭和初期の郷土教育理論から研究の観点を得た上で、子どもの地域学習を、子どもの「郷土」における「事象・事物」の経験として把握する。それら経験に対して、子どもの意識や子どもの生活地域の郷土教材の実態調査に基づいた諸要素の抽出及び分析を行い、教材開発と学習活動プランの提案に発展させる。得られた知見を授業計画の立案から授業実践へと発展させ、授業実践の分析によってその意義を検証する。

「郷土」を学ぶことに関与する要素の抽出と構造的記述は、郷土教育研究、社会科教育研究の知見、及びフィールドワークによる事例分析結果を交えて遂行する。

<平成24年度>

同年度は研究の合理的な遂行を実現するために3年間の研究計画を網羅する見通しを立てた上で、文献研究と2つの地域の事例研究を開始する。文献研究の対象とするのは郷土教育聯盟の理論と実践、及び三澤勝衛の理論と実践である。事例研究の対象とするのは、三澤勝衛が活動していた長野県における郷土教育の事例、さらには申請者が関わりを持つ奈良市内の小学校における地域学習の事例である。

1) これまでに収集してきた三澤勝衛の著作・論文、及び郷土教育聯盟等の先行研究の分類と分析、郷土教育上の価値と現代への適用可能性の検討をおこなう。この際に、先行研究として把握すべき対象に遺漏がないかどうかの確認をあわせておこなう。ここでは主として下記のような文献からアプローチを行うこととする。とくに文献からは、郷土教育の概念規定、郷土教育の意義、ならびに地域に即した実例を取り上げて検討する。

- ・伊藤純郎『郷土教育運動の研究』(思文閣、1998年)
- ・郷土教育聯盟機関誌『郷土』、『郷土科学』、『郷土教育』(全24巻)
- ・三澤勝衛『三澤勝衛著作集』(農文協、2009年)

2) 具体的郷土として対象とする奈良県北西部については、古代史研究としてのアプローチではなく、現実に近隣の小学校においてい

かなる「地域学習」としてのアプローチが行われているかを調査し、郷土教育としての要素を抽出し考察する。事例としては東大寺を校区に含む小学校を取り上げ、地域学習的アプローチがいかにおこなわれているのかを検討する。奈良市内ではこの対象を、高学年の歴史学習として扱う以前に、中学年の地域学習としても扱っており、さらに低学年生活科学学習の中にも東大寺周辺の探索活動が取り入れられている。高学年における歴史学習としての教材が、奈良市の小学生にとっては低学年における「日常的事例」(三枝孝弘1979)として意識され、低学年児童においても一定の「歴史学習」の足がかりが実現しているのである。発達段階を考慮すれば、低学年児童の意識にある東大寺盧舎那仏像と高学年児童の意識にある東大寺盧舎那仏像は同一ではない。同じ対象が異なる次元で意識されているのである。この意識の相違は、子どもたちの自由研究発表、日記、さらには授業実践等の事実から読み解くことが可能であり、一部の抽出児からは独自学習の成果に関する聞き取り調査をおこなう承諾を得ている。

とくに郷土教材を申請者自身のフィールドワークによって調査・記録することと同時に、郷土教材としての教育的価値を明らかにするために、関係者への聞き取り調査や児童へのアンケートによって、日常的な事物や事象に対して可能な限りリアルな教材価値を発現することができるように、さらにそれを授業実践レベルへと発展させるように検討をおこなう。

<平成25年度>

平成24年度におこなったフィールドワークと授業観察と授業構想へのアプローチを継続する一方で、その対象地区を拡大して、子どもの生活空間とは離れた他地域における郷土教材の事例と実践的事例に基づいて子どもたちの意識における「中核的因子」の存在を仮定し、その様態を明示的に記述していくこととしている。それによって人間形成諸因子の抽出及び構造的記述にアプローチする。日常的な事物や事象を学ぶことを通して子どもの中にいかなる郷土観が形成されるのかという要因とプロセスを緻密に検証することとしている。

「郷土教材」について資料の収集・整理と分析・考察、それに関わる授業実践の分析をおこなうが、そのこととあわせて研究目的の実現に直結する作業を開始する。抽出された因子が現実人間形成的機能を有しているか、またそれらが現実的に機能しているかどうかの検証をおこなう。

<平成26年度>

前年度までに郷土における人間形成諸因

子の抽出及び構造的記述のアプローチを開始しているため、当年度はそれに基づいてそれらの人間形成諸因子が有する「教育的機能」を明らかにするための実証的研究をおこなう年度である。主として実験授業もしくは研究授業において、根拠ある事実を掲げた考察をおこなうことを目処とする。それはたとえば具体的な単元構成案、学習指導計画案、及びそれに基づいた研究授業の実施によっておこなう。実証的研究の際には、諸事例において相互に矛盾するところや、あるいは相互に新たな類似性や関連性をもつところを検討し、収集あるいは実施した授業実践例を分析検討することによって、可能な限り適用範囲の広い「郷土教材」の要件と、理念的な「郷土教育モデル」の構築をおこない、それを研究授業において再検証する。

最終的に、子どもが日常生活を営む生活空間としての郷土の教育的機能に着目し、郷土がいかなる人間形成諸因子を有しているのかの抽出をおこない、それら諸因子を分類した上で諸因子を媒介する結合諸因子を見だし、それらを一体的構造として記述する。その際、諸因子の多様性及び諸因子が子どもに及ぼす影響の多様性を踏まえ、現実的に郷土が子どもに対して実現する教育的機能を明示するものとする。その際に、郷土教材の選択と呈示、学習指導構想、研究授業の実施、及び実施した研究授業の分析を通して仮説的な郷土教育モデルの実効性を検証し、その地

域的要素と普遍的要素の抽出と検証をおこなう。

ただし郷土教育の究極的目的は、子どもたちの郷土理解ではなく、子どもたちによる郷土の再興あるいは建設である。子どもたち自身が、その郷土に生きる生活主体として、郷土に対して働きかけを行うことができ初めて郷土教育は完結する。子どもたちがその生活環境から受ける影響に関して、郷土の教育力として再構成を行うためには下記のような文献から得られる知見を踏まえて、その上に「現代的郷土教育モデル」を構築する。

- ・宮坂広作『風土の教育力 -三澤勝衛の遺産に学ぶ-』(大明堂、1990年)
- ・大槻恵美『風土に生きる場所に生きる -地域の変容と再構成に関する地理学的研究-』(ナカニシヤ出版、2010年)
- ・森岡清志編『地域の社会学』(有斐閣、2008年)

4. 研究成果

これまでに収集してきた三澤勝衛の著作・論文、及び郷土教育聯盟等の先行研究の分類と分析、郷土教育上の価値と現代への適用可能性の検討をおこなった。下記のような文献からのアプローチを行うことを主とした。

とくに文献からは、郷土教育の概念規定、郷土教育の意義、ならびに地域に即した実例を取り上げて検討した。

- ・伊藤純郎『郷土教育運動の研究』(思文閣、1998年)
- ・郷土教育聯盟機関誌『郷土』、『郷土科学』、『郷土教育』(全24巻)
- ・三澤勝衛『三澤勝衛著作集』(農文協、2009年)

また、具体的郷土として対象とする奈良県北西部については、古代史研究としてのアプローチではなく、現実に近隣の小学校においていかなる「地域学習」としての現実的なアプローチを觀察することにした。

この調査により、郷土教育としての要素を抽出し考察したが、特に具体的事例として、東大寺もしくは興福寺周辺を近隣に持つ小学校を取り上げ、地域学習的アプローチの現実態と効果を検証した。奈良市内ではこの対象が高学年の歴史学習として扱われる以前に、中学年の地域学習としても扱っており、さらに低学年生活科学学習の中にも奈良公園界隈の諸活動(遠足、写生大会)が取り入れられている。高学年における歴史学習としての教材が、近隣の小学生にとっては低学年における「日常的事例」(三枝孝弘1979)として意識され、低学年児童においても一定の「歴史学習」の足がかりが実現しているのである。発達段階を考慮すれば、低学年児童の意識にある東大寺盧舎那仏像と高学年児童の意識にある東大寺盧舎那仏像は同一ではない。同じ対象が異なる次元で意識されているのである。この意識の相違は、子どもたちの自由研究発表、日記、さらには授業実践等の事実から読み解くことが可能であったが、一部の抽出児からは独自学習の成果に関する聞き取り調査をおこなう承諾を得ており、家庭における取り組みとその成果を合わせて収集することができた。

郷土教材を研究代表者自身のフィールドワークによって調査・記録することと同時に、郷土教材としての教育的価値を明らかにするために、関係者への聞き取り調査や児童へのアンケートによって、日常的な事物や事象に対して可能な限りリアルな教材価値を発現することができるように、さらにそれを授業実践レベルへと発展させるように検討をおこなうことに努め、一定の成果が得られた。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

飯島敏文「拡張された環境における経験密度の優位性-郷土教育の現代化をめざした郷土教育モデルの構築」、『大阪教育大学紀要第3部門』64巻第1号、2015年9月、1-11頁(掲載確定)

飯島敏文「学習活動としての仏女新聞」、『奈良県教育振興会』やまと』2014年1/2合併号、18-22頁

飯島敏文「現代における郷土教育モデルの構想-郷土教育の基盤としての自己教育及び家庭教育の意義と役割」、『大阪教育大学紀要第3部門』63巻第1号、2014年9月、1-10頁

飯島敏文「郷土教育の現代化をめざした郷土教育モデルの構築」、『郷土教育研究紀要』第2巻第1号、2-13頁

飯島敏文「郷土教材によるプロジェクト学習-新聞作りにおける対象の理解と表現-」、『郷土教育研究紀要』第1巻第1号、3-15頁

〔学会発表〕(計 1 件)

飯島敏文「直接的経験としての郷土」、『奈良県教育振興会第3回教育セミナー招待講演』、奈良大学通信教育部棟、2014年8月4日~8月5日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

飯島 敏文 (IIJIMA, Toshifumi)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80222800

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：